

第2回山城地域における府立学校再編整備に係る懇談会概要

1 日 時：平成16年8月24日（火）午後3時～午後5時

2 場 所：文化パルク城陽 会議室

3 内 容：養護学校の再編整備について

4 配付資料：別添のとおり

5 主な意見

(1) 小中高等学校や地域との交流について

委員から

- ・ 障害のある児童生徒が養護学校において、個々の発達の段階に応じた教育を受けることは適切であると考えるが、小さい頃から地域の中で障害のない子ども達ともふれあい、お互いに知り合うことが大切である。
- ・ 障害のある人にとって、困っている時など地域の方々から気軽に声をかけられ、支援を受けられるのはとてもうれしく感じる。逆に、地域の方々から理解されていないために、不審者と誤解されるのはとても悲しい出来事だ。
- ・ 地域の方々や障害のある人との交流が深まれば、障害に対する理解が進み、自然な形で障害のある人への支援が行われる。地域密着型の養護学校であるように願う。
- ・ 小中学校では、養護学校との交流を進めているが、子ども達の心の教育として大きな取組となっている。また、教職員の研修という意味からも重要な位置づけをしている。今後も養護学校において、地域の小中学校と積極的に交流を進めていただきたい。
- ・ 養護学校は小・中・高と様々な交流をしており、交流した児童生徒に聞くと、「障害があるけれども一生懸命頑張っている子と接すると、元気をもらって帰る」という感想が多い。また、ある識者は、優しさを身につけようとする、弱者から学ぶ必要があると言っている。小さい子どもや高齢者、障害者から学ぶ必要がある。そういうことからすると、小・中・高との併設は非常に意義がある。
- ・ 障害のある子を持つ若い保護者が、地域で孤立し、悩んでいる状況も出てきている。教育、医療、福祉等が連携し、保護者と地域との交流を深めていく必要がある。
- ・ 障害のある子と障害のない子が交流する場を年間十数回設けているが、お互いが楽しいから続いている。これからも盛んにしていくことが大事なことを考えている。
- ・ 高校生がボランティアで養護学校に出向き、交流することで、生徒達の障害のある子どもへの理解が深まっている。こうした経験は、お互いが理解しながら社会を形作っていくという意味で非常に大切なことである。今後もどんどん進めるべきである。
- ・ 中学校では、府全域でボランティアや体験学習を活発に行っており、養護学校のサマースクールにも出向いている。ふれあいという意味では効果があるが、教育の中だけでなく、地域の中でいろいろな子ども達が自然に生活していくという社会を作っていく必要がある。今回の養護学校の再編は、そういう社会づくりの一つのチャンスと考える。

(2) 障害児教育のセンター的役割について

委員から

- ・ 養護学校の専門性を生かし、小・中学生やその保護者への巡回教育相談や教員に対するサポートをしてほしい。
- ・ 高校にもLD（学習障害）など支援を必要とする多様な生徒が学んでいる。また、突然病気になり右往左往することもある。医療面は病院で対応できるが、教育面では養護学校の専門性の援助をいただければありがたい。養護学校と連携することにより高校の教育力も高まる。
- ・ これまでから総合型の養護学校の設置を要望しているが、それは地域の中で障害のある子ども達がしっかりと育まれていかねばならないという考えである。また、重複障害のある子が多くなっているが、専門性がどこに集約されるかということが重要であり、センター的役割が十分に担える養護学校にしていきたい。
- ・ 地域の中で学びたいという障害のある子どもや保護者の意向もきちんと受け止めなければならない、と考えており、養護学校の専門性を生かしたセンター的役割が重要になってくる。

(3) 再編整備について

委員から

- ・ 南部地域の養護学校の児童生徒数が増加している。南山城養護学校では、校舎を増築し、グラウンドが狭くなっている。いわば「人口密度」が高くなっている。また、在宅医療ケアを受けながら通学している子どもも増えている。こうした状況に対応して、再編整備を進めてもらいたい。
- ・ 南部地域の再編に当たって、養護学校の適正規模はどのくらいと考えているのか。
- ・ 宇治市、城陽市、八幡市、久御山町を二つの通学区域に再編するということだが、桃山養護に加えもう1校つくるのか、それとも2校つくるのか。
- ・ 1時間以上かけているスクールバスの乗車時間を短縮し、子ども達をできるだけ地域に返していくことが望ましい。
- ・ 20年、30年先の目指すべき養護学校を念頭に置いて、他府県に誇れる、障害のある子ども達にとって良い学校をつくってもらいたい。
- ・ 小さい段階から、障害のある人とない人が交流することにより、ノーマライゼーションの実践力を身につけた人材を育成していかねばならない。養護学校と高校を併設することによって、そういう人材が育成できるのではないか。
- ・ 通学時間が短縮されること、地域に密着するということから、養護学校の増設は必要である。また、人数は少ないが、自主通学している生徒があり、教育的効果もある。自主通学の交通の便も考えた上で、進めてもらいたい。

府教委から

- ・ 適正規模は一概には言えない。現在の府立の養護学校の施設状況からすると、児童生徒数が200人を超えると過密になるが、他府県の状況を見ても、敷地面積、校舎面積が十分確保されれば、200人を超えることも可能である。ただし、養護学校は、小・中・高という3学部からなり、いわば三つの学校を合わせ持った形であるため、大規模では学校運営への支障が懸念される。

- ・ 二つの通学区域への再編に関しては、単純に言えば、桃山養護のほかにもう1校必要になるが、桃山養護は、知的障害児の学校であり、肢体不自由児の受け入れは、現在の施設状況からは困難という問題がある。具体的にどうするかは、地域社会に密着した養護学校、専門的教育機能の充実という基本的観点に立って、いろいろご意見をお出しいただき、そのご意見を伺いながら決めていきたい。